



# セヴラック通信

Courrier de Séverac

第18号

2015 前期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

23

第23回例会  
2015年6月13日(土)  
術芸館

プログラム

例会

15:00-17:00

【講演】

『サルヴェ・レジーナの千年』

松本 智勇

～休憩～

【演奏】

セヴラック：リート・ロマンティック

Déodat de Séverac : Lied Romantique

山田実紀子 (Vn)、深尾由美子 (Pf)

セヴラック：ポンパドール夫人のスタンス

Déodat de Séverac : Stances a Madame de Pompadour

深尾由美子 (Pf)

セヴラック：ヴォカリーズ・エチュード

Déodat de Séverac : Vocalise-Étude

森朱美 (S) 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：空は、屋根の上で… (詩：ポール・ヴェルレーヌ)

Déodat de Séverac : Le ciel est, par-dessus le toit (Paul Marie Verlaine)

王は太鼓を叩かせた (フランスの古いシャンソン)

Le roi a fait battre tambour (Les Vieilles Chansons de France)

鎌田直純 (Br) 末吉保雄 (Pf)

曲目未定

館野 泉 (Pf)

懇親会

17:15～

〈連載〉セヴラック随想 (8) ●濱田滋郎 .....	4
〈連載〉大田黒公園散策 ③ ●末永理恵子 .....	8
〈連載〉セヴラックと私 ●豊永由美 .....	14
日本セヴラック協会第22回例会の報告 ●鎌田和夫 .....	16
第23回例会プログラム 表2	

## 〈連載〉セヴラック随想 (8)

濱田滋郎

### セヴラックのオルガン音楽

以前には、セヴラックといえどもっぱら「独特な魅力を持つピアノ曲の作者」であった。もとよりピアノ曲は素晴らしいのだが、その傍ら、セヴラックが実はもっと多彩な能力を発揮した作曲家であることも、近頃ではだんだんに知られてきた。そのことの良い例が昨年日本で実現した彼のオペラ《風車の心》の上演だが、ほかにも彼は管弦楽曲、劇付随音楽、室内楽、歌曲（民謡の編曲も加えれば、これは数多くあると言える）、合唱曲などを、結構書き残したのである。今回は、それらの内から、オルガン曲を取り上げてみたいと思う。なお、これについては、私の知る限り、CDの紹介をしながら述べさせて頂くことにしたい。

まず、セヴラックのオルガン曲には、どのようなものがあるだろう。1910年、パリを離れて南フランスのセレに住むようになったセヴラックは、13年頃からあと没するまで、折に触れて町の教会のオルガニストをつとめた。セヴラックは素晴らしい即興の才を持っていたと伝えられるから、教会の中でも随時、オルガンの即興演奏を人々に聴かせたものと思われる。もしもそうした演奏が書きとめられたなら、たくさんのオルガン曲が後世に残ったであろうが、実際には残されたオルガン曲の数、ましてや生前に出版されたものとなると、けっして多いものではない。さしずめ、次の3つの作品が挙げられる。

- 組曲 ホ短調 [前奏曲／コラール／ファンタジー・パストラール／終曲：フーガ] —— 1897～99年作曲、パリの相互出版より1902年刊。
- ヴェルセ（唱句）～高位聖職者でない聴罪司祭の晩課のための [ドミネ・クインクエ・タレンタ（あなたは私に5タレンタを）／エウジェ・セルヴェ・ポーネ（善良なしもべ）／フィデリス・セルヴス・エト・プルデンス（思慮深く忠実なしもべ）／ベアトゥス・イッレ・セルヴス（祝福されるしもべ）／セルヴェ・ポーネ・エト・フィデリス（善良で忠実なしもべ）]（註：各ヴェルセのタイトル（ラテン語）の訳は、椎名亮輔氏によるものに準拠させて頂いた）。—— 1912年作曲。パリのカトリック芸術書店より1913年出版。
- スコラ的小組曲～ラングドックのカリヨンの主題による [前奏曲（あるいは入場）／瞑想曲（あるいは奉獻）／祈り：コラール（あるいは奉拳）／メランコリックなカンティレーナ（あるいは聖餐）／フーガによるファンファーレ（あるいは退場）] —— 1912～13年作曲、1913年にパリ、カトリック芸術書店出版。

私が初めて以上の3曲に接し、さすがはこの作曲家、と思われる美しさに打たれた



Pierre Guillot  
*Déodat de Séverac*  
*Musicien français*

(パリ、L'Harmattan社、2010年)



Séverac :  
 L'Oeuvre pour Orgue  
 ピエール・ギヨー (Or)  
 WPSC-22091

(ワーナーパイオニア)



L'Oeuvre intégrale pour orgue  
 /Déodat de Séverac, comp  
 ミシェル・ルクレルク (Or)  
 AE-10141 (Aeolus)

のは、たしかまだ1980年代のこと、仏Eratoに録音された、ピエール・ギヨー Pierre Guillot 演奏による1枚のLP盤であった。幸いなことにその盤は日本盤としても発売され私が解説の筆をとった。ちなみに、上記3曲全部の演奏時間は40数分で、LPの表裏にちょうど収まったのである。これはその後ワーナーパイオニア社からCD盤(WPSC-22091)としても再発売されたので、愛蔵される方がたもあろう。ピエール・ギヨーはご承知と思うが、オルガンの名手であると共に、セヴラック研究の第一人者とさえ呼ばれる音楽学者で、2010年に名著〈Déodat de Séverac : Musicien français〉(パリ、L'Harmattan社刊)を著している。もちろんLP/CDの演奏は見事なもので、これを座右に置けば、オルガニスト=作曲家セヴラックに関して、まずは事足れり、としても間違いであるまい。

だが、いま私の手元には、セヴラックのオルガン曲を聴けるCDが、他に2点ある。いずれもフランス盤で、ひとつはミシェル・ルクレルク Michelle Leclerc (綴りがMichelleなので女性だとわかる) 演奏のAEOLUS盤(AE-10141)。ジャン・ラングレー、ピエール・コシュロー門下で、パリ・スコラ・カントルムほかで後進を導いたルクレルクは、パリのノートル・ダム・ドートウイユ聖堂にあるカヴァイエ・コルの銘器を用い、セヴラックの前記3代表作に加えてダンディ、ショーソンそしてアンリ・ミュレ(1878-1967)による、他に録音も無く(あるいは乏しく)貴重なオルガン作品を収録している。録音の日付は記載がないが、たしか2000年頃で、仏でディアパゾン誌では「5ディアパゾン」と最高クラスの評価を得た(ルクレルクは2006年に没したとのこと)。

代ってもう1枚は2011~12年録音と最も新しいセヴラック・オルガン作品のアルバムで、ガストン・リテーズ、マリー=クレール・アラン、ミシェル・シャピイらの薫陶を受けた、パリ音楽院1等賞修了者である俊英奏者オリヴィエ・ヴェルネ Olivier Vernetが、前記の3代表作のほか、他盤には聴かれない2つの小品を含めてセヴラックのオルガン作品を弾いている。しかも、その余白になお、オルガン伴奏による5篇の宗教歌曲を収めている点、類例のない貴重なアルバムをなしている。なお、彼の弾くオルガンは、独奏の場合には、モナコ市(モナコ公国)の大聖堂にあるドミニク・トマの製作楽器。合唱への伴奏には、アルザス地方サウスハイム市、サン=ローラン教会にあるムルハイゼン・オルガンが使われている。ちなみに、宗教曲の歌唱を受け持つのはコルマール少年合唱隊とい



Deodat de Severac :  
 La Lyre De L'ame  
 オリヴィエ・ヴェルネ (Or)  
 Lidi 0104244-12  
 (仏 Harmonia Mundi)

うボーイソプラノ主体の団体である。これはアルザス地方の団体だが、それが南仏の心を歌ったセヴラックの演唱に関わっているのは、おもしろい事実。あるいは、「地方性」ということからの親近感ゆえだろうか？ この合唱の指揮をとるのはアルレット・ステイエという名の女性である。申し遅れたが、この盤は Lidia という小レーベルの製作で、ディストリビューションは仏 Harmonia Mundi が行なっている。番号は〈Lidi 0104244-12〉。

さてここで、前記、3点のCDに共通して収められている、3篇の代表的オルガン曲について、改めてその特色を述べておきたい。

《組曲》ホ短調は全体で20～23分ほどの演奏時間を要する1曲で、教会内の行事に関わるというよりは、“純音楽的”に書かれた力作、初めの〈前奏曲〉は荘重なうちにもセヴラック生来の抒情味を含ませた曲で、対位法的な書法がとられている。第2曲の〈コラル〉は質朴な旋法風の主題による変奏曲である。音型変奏的な派手さはなく、言わば内面性に方向を定めた変奏曲と言えようか。変奏の数は5つで、力強いコーダにより締め括られる。つづく第3曲〈ファンタジー・パストラル〉へ来ると、世のセヴラック党はおそらく、「おお、ここにこそ彼が居る」と感じられることだろう。軽妙な運びのうちに、タイトルどおり、いかにも彼らしい牧歌的な味わいの風が吹くのだ。終曲の〈フーガ〉は、さわやかなテーマによりながらも、十分に想を練られた曲想で、「演奏はなかなか大変」と原文解説にある。

2つめに挙げた《ヴェルセ》は、教会内の聖歌歌唱に関わる作品。教会である種の聖歌が歌われるさい、合唱または斉唱が歌い出すに先立って、先導役の独唱者（聖職者であることが多い）が、短い「入りの句」をまず歌う。この部分をラテン語でヴェルスス、英語ではヴァース、そしてフランス語ではヴェルセという。ところで、この部分は歌われる代りに、オルガンで奏されてもいい。セヴラックもこの目的をもって、ほとんど即興的な短いオルガン用ヴェルセを作曲したのである。ここに含まれる5曲——各曲のタイトルはそれぞれ聖歌の歌い出しの句——は、いずれも1分前後という短さだが、それなりに味があり、セヴラック個人の持ち味も、そこに滲み出していないわけではない。

3つめの《スコラ風小組曲》もまた、教会内の式次第にちなんで作曲されている。第1曲が「入場」、最終曲が「退場」と副題されていることから、それは察せられよう。「スコラ的」というのは、セヴラックが師ダンディのもとで学んだ、スコラ・カントルム的な厳粛さ、生真面目さのことと思われる。しかし、それでいて、この5曲から成るオルガン用の組曲には、セヴラックらしい抒情性と感興の高さもまた、はっきりと感じられることを、ぜひ言わねばならない。〈前奏曲〉と〈ファンファーレ・フーガ〉（終曲）との間に

置かれた3曲は〈瞑想〉〈祈り（コラル）〉〈メランコリックなカンティレーナ〉と“ロマン派的”なタイトル付けがなされているが、いずれもそれなりに趣深い。なお、セヴラック流の「オルガン・ミサ」と呼んでもいいこの曲は、実は副題を持っており「ラングドックのカリヨン（連鐘）の旋律による」という。そして、その鐘の旋律とは、次のようなものである――



実を言って、この組曲のどの曲にも、この旋律がそのままの形で現れてくることはない。しかし、ヘ短調をとるこの旋律の「気分」は、どの曲の内にも浸透しているように思われる。ヴェルネの演奏した盤のほうには、すでに触れたとおり、上の3曲以外の、聴くことの本当に珍しいオルガン曲が2つ含まれている。ひとつは《四重奏曲への前奏》というもので、セヴラックが書くことを意図しながらも結局中断してしまった弦楽四重奏曲の〈序奏部〉だということである。これをセヴラックは3通りほど譜面に残したが、そのうちのひとつがオルガン用ヴァージョンだった。

もうひとつの《英雄的悲歌》という5分弱ほどの作品は第一次大戦終結の年（1918年）、「祖国のため命を失った戦士たちのために」（彼自身の言）書いたもので、他に〈慈悲深きイエス〉の題を持つ。オルガン独奏と、ヴァイオリンまたはチェロ、ピアノ伴奏の版とが残っているが、出版されたことはないという。これはセヴラックの作品中でも、あの〈リヴィアのキリスト像〉（組曲《セルダーニャ》）に相通ずる、熱く悲壮な情感を湛えた曲で、見過ごせないものだと言えよう。

以上、ギヨーは別格として、ルクレルクとヴェルネの奏楽は、共に優れたものであり、「勝負なし」と判定したい。カヴァイエ=コルをゆったりと壮麗に鳴らしたルクレルクに対し、モナコのオルガンを弾くヴェルネは比べて速いテンポをとるが、それなりに細やかさにすぐれ、味がある。

終わりに、ヴェルネ盤の余白に入っている宗教合唱曲について。少年合唱隊の好唱と相まって、《タントウム・エルゴ（かくも偉大な）》《4つの賛歌》《サルヴェ・レジーナ》《おお、聖なる宴よ》といったラテン語の楽曲が、生き生きと優しさを湛えて胸の内をうるおす。これら、信徒たちが教会で歌うことを想定した歌曲の内には、疑いなく、故郷の人々を深く愛したセヴラックの真心がこもっているのだ。

[連載]

## 大田黒公園散策 ③

大田黒元雄、日記の周辺

末永理恵子／文

2回にわたって大田黒元雄の先駆的な活動について述べてきたが、彼の『音楽日記抄第三』を斜め読みしていたところ、以下の行に目が止まった [1]。

[1920年]六月八日火曜

夜、青年会館でアイクハイムのヴァイオリンの演奏を聴く。曲目は去年の暮の慶応の時と殆ど同様で、最初にデビュッシイのソナタがある。

1919年の暮にはすでにドビュッシーのヴァイオリン・ソナタが慶応義塾で演奏されていたということであり、作曲年が1917年であることを考えると、これはかなり早い時期の演奏だ。これらの事実を追って当時の雑誌を見てみると『音楽界』に簡単に報告されていた。1920年6月8日の方は、大正9年7月号にレポートされている「女子青年会主催慈善ヴァイオリン独奏会」で、神田美土代町の青年会館で午後7時から開催された。

出演者はヴァイオリニストアイカウム氏夫妻 曲目ハ 一、ソナタ (イ) 快速調 (ロ) 間奏曲 (ハ) 終曲 (デビシー) 二、ラプレシウス (カペリン) 三、緩徐調 (マーテニ) 四、前奏曲及急速調 (マグナニ) 五、東洋のスケッチ (アイカウム氏) (イ) 日本 (ロ) 朝鮮 (ハ) 支那 六、ヴァースレベスデレブス (エンゲル) 七、歌 (イセー) 八、緩徐調 (フアー) 九、舞曲 (シヤブラー、レフラー) 一〇、ソナタ第六番前奏曲 (バハ) 一一、アブラーアンレブ (フアー) 一二、ポロネーズ第一番 (ウエニアスキー) 一三、スペイン舞曲 (サラサ) 一四、司伴奏 (イ) ローロマンス (ロ) 終曲 (ウエニアスキー)

人名や曲名は、この時に配布されたプログラムから転記されている (次頁図版参照)。

慶応の演奏会の方は、大正9年1月号に以下のように記されている (旧漢字を新漢字に改めた以外は原文通り)。

アイヒハム氏来朝大演奏会

ボストン管絃楽団第一提琴首席愛蘭人ヘンレイ、アイヒハム氏は印度へ渡航の途次日本に立寄り慶応義塾教授愛蘭詩人カズンス氏の紹介でワグネル、ソ [サ] イター主催の下に十一月廿八日午後二時から慶応大講堂に東西音楽の比較研究に関する公開講演会を開き、翌廿九日午後七時から同所に於て妙技を振つた氏は独奏者として名高きのみなら



**女子青年會**  
**慈善ヴァイオリン獨奏會** (當會事業費のため)  
 大正九年六月八日(火)午後七時  
 於神田美土代町青年會館

**偉大なる**  
**ヴァイオリニスト**  
**アイカハム氏**  
**夫妻を紹介す**

アイカハム氏は愛樂家の間、特  
 にヴァイオリンを愛する人々の間  
 には實に顯名として響きます。氏  
 はかの米國ボストンシンフォニー  
 オーケストラ内に於て最も重要な  
 一人で居られます。嘗て海外に  
 ては北京、上海、マニラ、東京  
 本で神戸、京都、舞井澤、東京  
 の各所で氏特獨の妙技を奮いて非  
 常なる好評を博されました。氏  
 の演奏中「東洋のスケッチ」なる  
 ものは支那、朝鮮、日本の國土  
 を氏自らが樂曲に編んだもので氏  
 の作品として確かに名目を著し  
 べきものであります。氏は近々本國  
 へ歸られせう。此度の演奏會を  
 其最後の名残となしませう。  
 因に同氏夫人はピアノ伴奏せら  
 れます。

**曲 目**

1	ソ	ナ	タ	.....	デ	ビ	シ	作
	イ	快速	調	.....	ハ	終	曲	作
2	ラ	プレ	シ	.....	カ	ベ	リ	作
	ス	ウ	ス	.....	マ	グ	ナ	作
3	緩	徐	調	.....	マ	グ	ナ	作
4	前	奏	曲	.....	マ	グ	ナ	作
5	東	洋	の	.....	アイ	カ	ハ	作
	イ	日	本	.....	朝	鮮	支	作
6	ヴァ	ース	レ	.....	朝	鮮	支	作
	ス	レ	ベ	.....	朝	鮮	支	作
7	歌	徐	調	.....	イ	セ	ア	作
8	緩	徐	調	.....	イ	セ	ア	作
9	舞	徐	調	.....	シ	ャ	プ	作
	ソ	ナ	タ	.....	シ	ャ	プ	作
10	ソ	ナ	タ	.....	シ	ャ	プ	作
	ア	プ	ラ	.....	シ	ャ	プ	作
11	ア	プ	ラ	.....	シ	ャ	プ	作
	ボ	ロ	ネ	.....	ウ	ニ	ア	作
12	ボ	ロ	ネ	.....	ウ	ニ	ア	作
	ス	ベ	ー	.....	ウ	ニ	ア	作
13	ス	ベ	ー	.....	ウ	ニ	ア	作
	司	伴	樂	.....	ウ	ニ	ア	作
14	イ	ロ	マ	.....	ウ	ニ	ア	作
	イ	ロ	マ	.....	ウ	ニ	ア	作

イ ロ マ ン ス      終 曲

明治学院大学図書館付属日本近代音楽館蔵

ず、作曲に於ても幾多の傑作を発表して居る、曲目の主なるものは一デブノナアタ二、  
 タプランの「アンダンテイノ」前奉快速記」「極東描写」「其他夢へ、子供の夢、円舞  
 的諧謔曲、奏鳴曲の前奏曲、アリア、パラレレーズ及び競奏楽等であつた。

講演会が1919年11月28日、演奏会が29日。名前の読みも曲目も不確定な状態のよう  
 で、まだ来日したばかりだったのではないかと想像される。

大田黒の『音楽日記抄 第二』から、この慶応の演奏会のあたりの記述を見てみると、  
 「ヘンリー・アイヒハイムのレサイタル」の感想が記されていた。「クーブラン、マルティ  
 ニ、プーニャニ、バッハ等の古典的な小曲や、エンゲル、イザイ、シャブリエー、クライ  
 スラー等の作品並びにウニアフスキの第二司伴奏の一部其の他を演奏した。そしてまた  
 彼の作にかゝる「極東描写」と称せられるもの、うち、日本、朝鮮、支那を夫々あらは  
 す三つの洋琴曲は其の夫人に独奏された」と、正確にプログラムを把握している [2]。

アイクハイム Henry Eichheim は、1870年シカゴに生まれ、1942年サンタバーバラで  
 没したアメリカのヴァイオリニスト、指揮者、作曲家である。1890年にボストン交響楽  
 団のヴァイオリニスト奏者となり、22年間つとめた後、その後は作曲、室内楽、指揮、  
 リサイタルといった音楽活動を展開した。1915年、初めてアジアを訪れた際にアジアの  
 民族音楽の研究を開始、以後、1919、1922、1928、1930年代半ばと5回も東洋を訪れて [3]、  
 楽器を集めたり音楽の素材を採集したり、またパフォーマンスの写真を撮ったりして研

究を進めた。彼のノートは失われたが、楽器と写真のコレクションはカリフォルニア大学サンタバーバラ校、手稿譜と演奏会プログラム等は、シカゴのニューベリー図書館 The Newberry Library で保存されている。

フランスの新しい音楽に傾倒しており、ドビュッシーのヴァイオリン・ソナタのほか、ダンディのヴァイオリン・ソナタ、ラヴェルのピアノ三重奏曲のアメリカ初演を行った。作曲家としてもいわゆる印象派の影響を強く感じさせる作風をもち、東洋の音楽の研究成果を盛り込んだ作品を発表している。ガムランの楽器を用いた「ジャワ」（1929）、「交響的変奏曲〈バリ〉」（1931）などは、東洋の楽器と西洋音楽と融合させた先駆的作品と言われる。友人のストコフスキーによる指揮、シカゴ交響楽団の演奏で管弦楽曲のレコードが録音されており、YouTubeでも「バリ」と「日本の夜想曲」（組曲「東洋の印象」の1曲）を見つかることができた。また、当協会会員の宮山幸久さんがプロデュースされた『日本の思い出』（キングレコード、KKCC-3021）にもピアノ版の「日本のスケッチ」と「日本の夜想曲」が収録されている。現在ディスクは品切れで購入できなかったが、iTunes Store で入手できる。

さて1919年に話を戻そう。11月29日の演奏についての批評から引用する。

先づ其の演奏全体から受けた感じを云へば、此の人は技巧に熟達して居るもの、所謂ヴィルトゥオーゾではない。即ち、独奏者として広いホールの中で演奏すべき人ではない。どこ迄もアンサンブルの演奏者だ。其の演奏は派手でない代りに、摯実だ。唯あれだけ種々な楽曲に対する理解を持つて居ながら、其の演奏がテムペラメントに欠けて居るのは、恐らくアンサンブルの演奏者として自己を現はさないやうにする事に慣れた、めであらうと思はれる。其の結果其の演奏は割合人に深い感銘を与へない。それは寧ろどこか物足りない感じを人に与へる。

聞くところに依るとアイヒハイムは写真にかけては、米国のアマチュア中の第一人者ださうだ。今日の写真が如何に藝術的に進歩して居るかを知つて居る人は、此れに依つても彼が藝術家としての素質に豊かな事を想像し得るだらう。

彼が音楽上の各種の運動に対して偏見のない深い理解を持つて居る事は今夜のプログラムからも容易に證拠立てられて居る。

当時49歳の外来演奏家に対する、27歳の大田黒の堂々たる演奏批評である。大田黒自身が当時、写真芸術を本格的に探求・実践していたことも手伝ってか、基本的には敬意と共感をもって迎えている（大田黒は福原信三らと共に大正10年に「写真藝術社」を結成し、印象主義絵画以降の近代絵画のスタイルを写真で表現しようとする芸術運動を展開した）。この日のプログラムのなかで最も大田黒が目にしたのはドビュッシーのヴァイオリン・ソナタであった。

デビュッシイはたしかに此の曲のうちに其の探求して止まなかつた理想的の美を表現しようとして居る。そして其の美は飽く迄も洗練されたラテン精神の精髓とも云ふべきものだ。彼はたしかにラモー、クーブラン等に依つて築かれた伝統的の美を、極めて古典的であると同時に近代的の精神を以て継承して居る。此の曲を聴くと、心が既に枯淡の境に達して、其の精神のみが独り高く飛翔して居る人の作品だといふ感じがされる。それからまた其の独奏楽器の取扱ひに就ても彼は明らかに其の愛する伝統に抛りながらも、より新しい路を開いて居る。此はたしかに独奏楽器としてのヴァイオリンに新しい意義と生命とを与へるものだ。

演奏会から約2週間後の12月14日、夕食の終わるころに大田黒は、帝国ホテルの食堂にアイクハイム夫妻を訪ねてインタビューを行い、訳書『微笑と嘲笑』（音楽と文学社、1920）に「アイクハイムと語る」として収めている。

『先達御主人の曲をお弾きに成るのをうかがひました』と私は夫人に云つた。

『ああ、慶応で？ どうお思ひに成りました？』

『さあ、あの支那の曲の一部がいいと思ひました』

『日本のは？ きつと日本らしく聞えませんでしたでせう？』

『いいえ、中頃のころは大変日本的でした。唯、あのスケールが調和しないやうです』  
するとアイクハイムは口を入れた。

『あれはね、知恩院で聴いた鐘のオーヴァー・トーンを出さうと思つたんです。それからあの中のエロディーは船の中で無線電信の技師が尺八で吹いて聞かせて呉れたのを使つたのです』

食事が終わって夫人が部屋へ去ると、さらに話が続く。

『私の聴いた範囲から云ふと、日本では声楽家の方が器楽家より二十五年ぐらゐ進んで居るやうですな。私は東京でもう度々コンサートに行きましたが、今日の会（南葵楽堂に催された音楽学校の管弦楽の演奏会）にしてもさうです。どうも器楽の方は頭の悪い独逸人の教師に大変進歩を妨げられて居るらしい。[略] 殊にあのコンダクターは？ 日本人があんな男に音楽を習って居る間はとても進歩する見込みはないですなあ。[略]』

以下この「独逸人」が、ヴァイオリニストとしても指揮者としてもまるでなっていない、とする手厳しい批判が続くので省略するが、批判されている「独逸人」はグスタフ・クローン（1874?）のことで、1913年から25年までお雇い外国人として東京音楽学校で教え、ベートーヴェンの交響曲6曲の日本初演などの業績が知られている。アイクハイムが徳川頼貞 [4] に、例えばラフマニノフのようにもっと良い教師を雇わないのか、と尋ねたところ

ろ、報酬を払えないから仕方がない、という答えだったのだそうだ。「音楽家は金に成るから日本には適かないんだ。文学者は世界中どこでも碌な報酬は受けないから、それでラフカディオ・ハーンだのチェムバレンなんかのやうな偉い人が来て居たんです。〔略〕私だつてもう十年若ければ日本に来て住みたいと思ふ。けれど私にしても日本で出す報酬ぢやあ御免を蒙りますからな」などと感想を漏らし、日本では音楽界のみならず建築などもドイツ偏重で、悪趣味なものまで真似ていると指摘。大田黒も共感しているが、日本で声楽家の方が進んでいることに関しては、早期教育がより重要な器楽は、日本ではまだ習得が困難だから、と分析してみせる。当時の日本の音楽をめぐる状況を窺い知ることができて興味深い。

アイクハイムは熱心なワグネリアンだったが、初来日の際に能を鑑賞して衝撃を受け、ヴァーグナーへの熱が冷めた、と大田黒に話し、日本人はヨーロッパの音楽にばかりおぼれない方が良く、と忠告している。10年間毎日北斎を見続けているが、それはその精神——濃淡と、ドビュッシーの能弁な休止に似た、能弁なスペースの用い方——を自らの写真に表現しようと思っているためであって真似するためではない、と説き、同様の態度をとるよう勧めている。日本人は芸術的で辛抱強いので、指導者さえ良ければ必ず完成するだろう、とも述べている。

インタビューの中で語られた予定の通りなら、1月に、来日する娘と共に寒さを避けてジャワからインドに渡り、再び4月から6月まで日本に滞在したのであろう。そして冒頭に紹介した1920年6月8日の演奏会があり、さらに翌日にはアイクハイム送別の晩餐会が行われた。その様子も『音楽日記抄 第三』に綴られている。会場は三光町（現港区白金）の徳川邸、ほかには声楽家の武岡鶴代（1895-1966）と音楽評論家の二見孝平（1885-1970／大田黒主宰の「音楽と文学」の同人）が招かれたという。アイクハイムがリサイタルで弾いた曲を何曲か弾き、夫人が大田黒の熱心なリクエストに応じてドビュッシーの「喜びの島」を弾き、武岡が「ローエン格林」の「エルザの夢」を歌った。夜の11時過ぎまで話が弾んだ、楽しい宴だったようだ。

## 註

- 『音楽日記抄』は1914年、1916年、1920年と3回にわたって「音楽と文学社」から刊行されており、初巻は1914年1月から6月、「第2」は1916年から1919年、「第3」は1920年3月から1921年10月までの音楽体験が綴られている。当時の音楽事情を知ることができる貴重な資料だ。以前は所蔵している図書館が少なく、読むのが難しかったが、今では国会図書館の近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/>（通称「近デジ」）で誰でも読むことができる。
- 人名と曲目を現在の普通の呼称に変換することを、以下に試みた。  
ドビュッシー「ソナタ」  
クライスラー「ルイ・クーブランの様式による才たけた貴婦人（La Précieuse）」か。  
クライスラー「マルティーニの様式によるアンダンティーノ」か。  
クライスラー「ブニャーニの様式による前奏曲とアレグロ」か。

アイクハイム「東洋のスケッチ」（ピアノ曲。「日本のスケッチ」「朝鮮のスケッチ」「中国のスケッチ」）のちに「東洋の印象」と改め「日本の夜想曲」と「北京の夜の印象」を追加したと見られる）。カール・エンゲル「？」 作曲者は恐らく、『微笑と嘲笑』掲載の対談で、注目の作曲家としてアイクハイムが名前をあげているカール・エンゲル（1883-1944）であろう。曲名は特定できていない。プログラム紙片を作った日本人が作品名や人名をカナに直す際の癖から判断すると、おそらく原文はフランス語であろうと想像し、Vers le pays des rêves 等か、と類推しているが未確認である。

イザイ 手がかりが少なく断定はできないが、「二つの有名なアリア」か。

フォーレ「アンダンテ」

シャプリエ作曲、レフラー（C.M.Loeffler）編曲「スケルツォ・ワルツ」

バッハ パルティータ第3番ホ長調 BWV1006 より「プレリュード」

フォーレ「夢の後に」

ヴィエニャフスキ「華麗なるポロネーズ第1番」

サラサーテ「スペイン舞曲」

ヴィエニャフスキ ヴァイオリン協奏曲第2番より第2、第3楽章

慶応の演奏会の方は完全な曲目一覧が見つからないが、雑誌記事と大田黒の記述を総合して、以下の曲目が含まれていたものと思われる。

ドビュッシー「ソナタ」

クライスラー「マルティーニの様式によるアンダンティーノ」か。

クライスラー「ルイ・クーブランの様式による才たけた貴婦人（La Précieuse）」か。

クライスラー「ブニャーニの様式による前奏曲とアレグロ」か。

アイクハイム「東洋のスケッチ」

フォーレ「夢の後に」

エンゲル「？」

イザイ「子供の夢」か。

シャプリエ＝レフラー「スケルツォ・ワルツ」

バッハ ソナタのプレリュード。特定できないが6月の演奏会と同じパルティータ第3番か。

雑誌記事にある、「アリア」と「パラフレーズ」は何を指すのか不明。

なお、クライスラーがバロック期の作曲家の佳品を発掘して編曲したことにして、いくつもの作品を発表していたという事実を公表したのは、1935年のことである。

3. Baker's biographical dictionary of musicians (c2001) による。
4. 徳川頼貞（1892-1954）は紀州徳川家16代当主で、「音楽の殿様」として知られる。1913年から15年までヨーロッパに留学して音楽学を学び、ブッチャーニやプロコフィエフをはじめ、多くの音楽家と交友があった。飯倉町（現在の麻布台1丁目）に我が国初の音楽専用ホール「南葵楽堂」を建設し（1918年竣工）、地下には「南葵音楽文庫」を設けて、楽譜や楽書の膨大なコレクションを取めたが、関東大震災で大きな被害を受けることになる。



リレー連載

## セヴラックと私

豊永由美

セヴラックとの出会い、それは10年ほど前になるでしょうか。

ピアノ教師対象の講習会ででした。若くて可愛らしい先生が紹介して弾いていたのが《休暇の日々から》第1集〈シューマンへの祈り〉と〈ロマンティックなワルツ〉でした。

4小節くらい聴いたところで衝撃が走りました。「えっ?! 何ていう作曲家の曲だろう?」聞いてみると、ドビュッシーやラヴェルと同じ時代のフランスの作曲家とか。「こんな素敵な曲を作る人がいたなんて!」その足ですぐ楽譜売り場を目指していました。

『セヴラックピアノ作品集1』を購入。詳細な解説や写真も載っています。1曲ずつ弾いているうちにますます惹かれ、「私もここ〔セヴラックの生家〕へ行かなくては」と思ったのです。こんな出会いは初めてです。どんなに好きな作曲家であっても生まれ故郷まで行ってみたいと強く思うことはこれまでにありませんでしたから。

もっと情報を得たいと思い、インターネットで検索すると、ヒットしたのがセヴラック協会のホームページと深尾由美子先生のホームページでした。

それから数年後、例会へ行ってみようと思い立ったのが2010年のことです。その時、メンバーの皆さんがセヴラック音楽祭の際、訪れた時の話をしているのを聞き、写真を見せていただいているうちに「私も」という気持ちはどんどん強くなっていきました。

フランス語で会話できるようになりたいと思い、語学学校へ通い始めると、間もなくフランスへ訪れるチャンスがやってきたのです。

それは、2013年2月のこと。一年で一番寒い時期です。トゥールーズからレンタカーでサン=フェリクス=ロラゲへやっとの思いでたどり着いた時、外は真っ暗になっていました。

その夜は寒くて電気ストーブを借りたほど。

翌日目覚めると、窓の外は風に舞う雪で真っ白、辺りは静寂に包まれて別世界のよ



うでした。セヴラックの生家を見に行く前に、宿泊したホテルのマダムと片言のフランス語で会話できたこともとても嬉しい思い出です。その日は、日曜日でしたので、近くの店もお休み。教会では、朝の礼拝が行われていたようです。雪の降る中をぐるっとひと回りして、すれ違ったのは黒いワンちゃんとひとりの男性のみ。小高い所に立って「このあたりがひまわり畑だろうか？」など想像してみました。少し驚いたのは、冬でも枯れることなく青々とした草木が一面に見渡せること。次はぜひ、ひまわりの咲く時期に訪れたいと思っています。いつかフランスでのオペラ公演が実現できることも夢みながら。

最後になりますが、入会後に友人となった本宮さんや多田さん、山根さんからお声掛けいただき、音楽を通じた交流が続いていることに幸せを感じます。

また、昨年初上演されたオペラ《風車の心》では、皆さん方と同じ舞台上で共演でき、一生忘れられない思い出になりました。

「セヴラックの音楽が好き」というだけで多くの人達と時間を共有できたり、分かり合えることがあるなんて、何て素晴らしいことでしょう。セヴラックがこのご縁を繋いでくださったのですね。例会での演奏会も、本当にいつも楽しみで仕方ありません。セヴラックの曲だけでなく様々な曲に出会える素晴らしい場所を提供していただいていることにも感謝しています。

## 日本セヴラック協会第22回例会の報告

鎌田和夫

第22回例会は昨年11月9日に開かれました。ことのほか平和でユニークな幕開けでありました。ポリネシアの『サンゴ礁の人々と音楽』と題し、慶応大学名誉教授の近森正先生の興味あるお話からはじまったからです。館野泉先生と中学時代の同級生ということでした。考古学研究会で一緒だったという二人は日吉の貝塚でヤジリなどを採集していた親友同士。その近森先生はポリネシア諸島の文化の専門家で、サンゴ礁の起源や神話伝承の研究などを続けて40年ということでした。サンゴ礁から島が生まれて来る話。島の音楽の話。ポリネシアの人々は昼に寝て、日暮になると動きだす。まさに音楽を中心に楽しむ日常生活のようです。さまざまなものを楽器にして、いろいろな音楽を作っては歌い、踊る。そんな喜びでいっぱいのお話を一時間余。セヴラックが話を聞いていたら、どんな印象を持ったでしょうか。タヒチのゴーギャンをおもい、マコ（詠唱歌）やチラ（朗唱歌）の音楽に興味を抱き、面白い音楽を作ったかもしれない。そんなことをおもいながら、面白がっていました。

休憩後、末吉保雄先生が館野先生から預かったセヴラック直筆の草稿を訳され解説を。20代後半に作曲した「フクロウたち」のことが書かれた1910年代の手紙ということでした。そして鎌田直純さんによってボードレール『梟』という詩が朗読され、それをバリトンで歌ってくれました。悲しく沈んでゆく夕日の風景が鮮明に情景されていくようでした。続いて本宮廉子さんのソプラノでセヴラック《ミュゼット》。楽しく明るい曲が一瞬の出来事のように終わってしまう儚さ。次は森田学さんのバリトンでヴィラルールの詩《雪の時》を。1903年作曲のセヴラックの歌で、哀しく舞い散る雪の中に月の光が仄かに見える夜の情景が浮かんで来ました。もちろんピアノ伴奏は末吉先生。

最後に館野先生の登場。「今日はとてもいい日でした。中学の同級生の近森君の素敵な話が聞けて、とてもうれしかった」と感謝の気持ちを述べられてから、モンサルヴァーチェ《左手のための3つの作品》が演奏されました。それぞれに副題が付けられ〈そう、モンポウへ〉〈オスカー・エスブラの追憶に捧げる子守歌〉〈ルビンシュタインのためのページ〉。アンコールにモンポウ《プレリュード》を。それぞれの曲に合わせ、詩がイメージされましたので記しておきます。



「そう、モンポウへ」を聴いて

「音のなく」

鎌田和夫

音のなく	ナミダなく
ゆるやかな風	泣かせてくれる
通り抜け	雨音に
静寂の声	かなしみの人
たかまりの	
流れる調べ	音もなく
音のなく	泣く雨だれの
流れるままに	哀しみの
流れゆく	うるみゆく声
	溶けゆきて
音はなく	なにも聞こえず
なりわたる波	音もなく
むせび泣く	何もこたえず
くぐもりの声	何もなく
ふるわせて	
空にひびけど	ナミダなく
音はなく	泣かせてくれる
空に聞こえず	雨音に
むなしさを	よろこびの人

「オスカー・エスブラの追憶に捧げる子守歌」を聴いて

「とりとめのなく」

鎌田和夫

いきつく道を	つながりのなく	暗雲の空
追われゆく	あてどなく	呼びよせる
迷宮の中	速くたどりて	すさまじき風
追憶と	さきぼそり	あなどれず
遠くへだたり	ひとの気配の	夢の破れて
ぐずぐずの	なき街を	おかしさを
夢のおもいで	心ふるえて	堪えきれずに
つぎたされ	夕焼けの	おもしろく
むれとぶ鳥を	迷宮の道	道なき道を
めじるしに	あたふたと	歩みゆく
とりとめのなく	とりとめのなく	とりとめのなく
さまよえる	声のなく	迷宮へ
	道はなく	道はなく
	血で洗われた	血で洗われた
	道の造られ	道のつくられ
	とおる人	とおる人

「ルビンシュタインのためのページ」を聴いて

「燃えてゆく」

鎌田和夫

焦げずに熱く  
燃えてゆく  
枯れずに熱く  
燃えてゆく  
こころに熱く  
燃えてゆく  
熱きひかりの  
照らしゆく  
熱きこだまの  
響きゆく  
熱きこころの  
ゆらしゆく

燃えるあかりの  
熱きてに  
燃えるかたちを  
熱きゆめ  
燃えるすがたの  
熱きかげ  
みなぎる腕の  
弾みゆく  
みなぎる肘の  
ゆるやかに  
みなぎる指の  
しなやかに

月光の  
白き残照  
消え去りて  
枯れゆく影よ

しずかな眼  
見すえる姿  
さわやかに  
孤高の影よ

モンポウ『プレリユード』を聴いて

「散りゆくよ」

鎌田和夫

この淋しさを  
気づかぬか  
この苦しみを  
わからぬか  
深まる秋に  
こころ散る  
枯葉ちるちる  
舞いおちる  
ふたつの影の  
離れゆく  
どちらともなく  
わかれゆく

この淋しさを  
たれに云う  
この苦しみを  
朽ちる葉の  
哀しみの声  
沈みゆく  
病葉のワレ  
散りゆくよ

セヴラック通信 第18号 2015 前期 日本セヴラック協会 会報

---

2015年6月13日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: [severac.japon@gmail.com](mailto:severac.japon@gmail.com)

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: [kameyan@jcom.home.ne.jp](mailto:kameyan@jcom.home.ne.jp)

印刷・製本：フェデックス・キンコース・ジャパン

---

